

「ところが、旅をしていたあるサマリア人は、その場所に来ると、その人を見て気の毒に思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』この三人の中で、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人に憐れみかけた人です。」イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカ10：33～37）

主イエスの人気は日増しに高まり、多くの人々の関心を集めた。殊に、律法学者たちは、主イエスの人気に押されて、自分たちが疎んじられていく状況に気を揉んでいた。そのような時、一人の律法の専門家が立ち上がり、主イエスを試そうとして、問いを發した。それは、「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」という問いであった。この問いは当時、大きな問題として論争されていた。それは、律法体系は膨大で、何が重要な律法であるかが分からず、混沌としていたからである。主イエスは、問いかけてきた律法学者に「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と、逆に問うた。律法学者は、その問題について考えていて、彼なりの結論を出していたのであろう。「『心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります」と答えた。主イエスは、「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」と言われた。永遠の命とは死んでから与えられるものではなく、生きている今、神と結び合い、確かな生を生きることである。主イエスは、確かな生は神を誠心誠意愛すること、また、隣人を自分のように愛することによって、得られると語り続けておられた。律法学者の答えは正解であった。律法学者は試そうと思って問うたのに、自分が答える羽目になってしまった。自分の論争力を現わそうとして、「では、隣人とは誰ですか」と畳みかけてきた。

すると、主イエスは一つの譬え話をされた。ある人がエルサレムからエリコに下って行く山道で、追い剥ぎに襲われた。追い剥ぎは服を奪い取り、殴りつけ、瀕死の状態にして、逃げ去った。そこへ、一人の祭司が通りかかった。彼は、瀕死の旅人を見ると、反対側を通って行ってしまった。次に、レビ人が通りかかったが、彼も反対側を通って行った。祭司は宗教家であるから、神と隣人への愛についてはよく知っていたであろう。レビ人は神殿に関わる仕事をする人で、信仰深い心を持っていたであろう。しかし、彼らは死にそのような人を無視した。三番目にサマリア人が通りかかった。彼は、旅人を見て、気の毒に思い、傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行った。そして翌日、宿屋の主人にデナリオン銀貨二枚を渡し、介抱を依頼し、足りなければ、帰りに支払うと約束して、出て行った。サマリア人はユダヤ人から軽蔑されていた。差別の痛みを知っていたので、旅人の苦しみを自分事としたのである。主イエスは、律法学者に、誰が追い剥ぎに襲われた人の隣人になったかと問うと、彼はサマリア人を軽蔑していたので、サマリア人とは言わず、「その人に憐れみかけた人です」と答えている。主イエスは「行って、あなたも同じようにしなさい」と言われた。隣人とは誰かと机上の論議をすることではなく、身を削って具体的に愛することだと、主イエスは説かれたのである。